

夫婦の役割は損得では語れない

上 廣 哲 治
うえ ひろ てつ じ

今年の秋季大会は、コロナウイルスの影響により、これまでにないかたちでの開催となりました。私はスタッフと共にPCR検査を受けた上で、当初の予定どおり各地の会場へおもむき、無聴衆の場内で講演を行って、その様子をオンラインでライブ配信しました。

広い会場でただ一人、誰もいない客席に向かって語りかけるのは無念の極みでしたが、熱心に耳を傾けてくださる会友の皆さんがそこにおられることをイメージしながら、懸命に責務を全うすることに努めました。そのなかで私を感じていたのは、直接皆さんとお会いできなくても、時を同じくして共に学び合えることの喜びや、強い絆で結ばれていることへの感謝の気持ちでした。

私やスタッフに対するお心遣いから、「わざわざ地方の会場まで、そのつど足を運んでいただきながらも、本部で撮った動画を全国に一斉配信すればよいのでは」という提案もいただきました。また、そうしたほうが「経済的」かつ「効率的」であるのは、当然のことでしょう。

しかし、コロナウイルス禍のなかで、イベントに関わるさまざまな業者が苦境に立たされていることを思うとき、そのような選択をすることはできませんでした。結果、会場の設営も音響も照明も、従来大会と同じようにしつらえることにしました。効率や損得を考える前に、まず助け合いの精神にのつとること、「我も人も仕合わせ」を貫くことが大切なのではないか。それこそが、倫理の大道を進む者に求められる姿勢ではないかと思つたのです。

同じことは、今回の講演のテーマとなつた「夫婦愛和」にも当てはめることができます。夫婦にとっては、もちろん経済も効率も無視できない大きな問題です。しかし、互いの立場を損得によって見るようになると、往々にしてパートナーへの不満を募らせることになってしまいます。夫婦の愛和にとって何よりも大切なのは、損得勘定のない、支え合いや助け合いの姿勢なのです。

たとえば作家の山崎ナオコさんは、次のような例を挙げて、夫婦のあいだに経済的な役割分担の発想を持ち込むことの危うさを指摘しています。

「産休育休中の妻、あるいは、妊娠を機に仕事を辞めた妻に対して夫が、『今は専業主婦なのだから、家事や育児は妻の担当。自分は家族のために稼ぐ。分担して家族を運営しよう』と考えてしまい、妻がそれをつらく感じて悩む、ということが現代の夫婦によく起こっているようだ。／自戒をこめて、『それは夫婦の考えを変えていった方がいんじゃないか』と思う。家は会社ではない」（『かわいい夫』）

「自戒をこめて」というのは、山崎さん自身がこの夫婦のように、家を会社と同様のものと考えていたことがあるからです。書店で働いている夫は、山崎さんより収入が少なくないにもかかわらず、朝五時には仕事に出かけるような厳しい労働環境にあります。家事への意欲も十分持っているし、努力も惜しまないけれど、時間的にも体力的にも限界がある。その夫に対し、山崎さんは結婚当初、「生活費の大半を

私が出しているのに、家事の多くを私がこなしているのはなぜか」「私だけ損をしている」と思い込み、「分担したい」「負担をきちんと配分したい」と、いらいらしていたと言います。

会社のなかでの話なら、そうした不満が出てくるのも当然かもしれません。役割分担をきっちりしなければ不公平ではないか……。ところが山崎さんは、次第にその考え方を改めるようになります。

「だが、夫婦はただの人間関係だ。払える方が払って、やれる方がやればいい。夫婦なのだから損も得もない。『身体や精神が持たない』『物理的に無理だ』というのなら改善しなければならぬが、『損をしたくない』というケチケチした考え方に囚とらわれているだけなら、考えを捨てれば良い。そう気がついたら、私は楽になった。他人に『あなたが損をしている』『夫婦で分担できていない』と思われる方が意に介さない。自分が楽しいと感じる結婚生活ができれば、それだけで幸せになれる」(同前)

夫婦を「ただの人間関係」とするとらえ方に驚かれる方がいるかもしれませんが。しかし、山崎さんが言うように、本当は「ただの人間関係」であることこそが大切なのです。それなのに、その根本を忘れ、損得などの余計な観念(「ケチケチした考え方」)に囚とらわれている人が、あまりにも多いのではないのでしょうか。支え合うことの大切さを声高こゝろたかに説かなくても、「夫婦はただの人間関係なんだから、支え合うのが当然でしょう」とさりとて言い切れれば、それこそ理想的な愛和のあり方なのだと思います。

損得で物事を判断する傾向は根強く、現代の結婚観にも表れています。秋季大会の講演でも触れたように、男性であれ女性であれ、結婚を経済的な問題ととらえている人が多くなっているようです。幸福のためには収入が安定していなければならず、それが保証されなければ、結婚に踏み切れないという人が増えているのです。そこには、貧しい二人が共に苦労を重ねながら幸福をつかんでいくという発想は

ありません。結婚は初めから「バラ色」でなければならぬ。だから、夫婦生活のスタートであるはずの結婚が、「ゴールイン」などと呼ばれているのかもしれませんが。

山崎さんも、以前は結婚を理想化し、「自分にぴったり、世界で唯一の人を探し出してするもの」と思っていたと言います。笑いごとではなく、そんなバラ色のゴールインを求めている人は少なくありません。しかし、山崎さんは「今はそう思わない」と言います。そして夫の存在を、街の本屋さんで出会った一冊の本にたとえています。

ふらりと立ち寄った書店で、目についた本になんとなく手を伸ばす。世の中にはもったいい本があるだろうけれど、「私」はその本を読み、その本が好きになっていきます。それは、「たまたま側そばにいる人を愛す」ことに似ていると言います。世界でいちばん優れた本など読まなくてもいい。それよりも、ふと出会った『運命』の一冊を、自分なりの読み方で深く読み込んでいくほうが、ずっと素敵な読書になると言うのです。山崎さんは同じように、「夫が世界一自分に合う人かどうかなんてどうでもいい。ただ、側にいてくれる人を愛し抜きたいだけだ」と思うようになったと言います。

初めから世界一のパートナーを求める人にも、高収入のパートナーを求める人にも、欠けているものがあります。それは「現実大肯定」の姿勢です。現実大肯定とは、批判精神をなくすことではありません。無数のプラスとマイナスでできているこの現実をいったん受け容れ、プラスと思われるところを伸ばし、マイナスをプラスに転じていく姿勢です。損得勘定や他人との比較でパートナーを見る前に、まず「側にいてくれる人」のすべてを受け容れる。そこから二人三脚の長い旅を始めてはいかがでしょう。それは素敵な読書体験にもまさる、奥深く楽しい倫理の実践になるはずです。